

自分のさかな興味をわかせることもあり、また山路の旅はいろいろの悦ばしい幽静な事にであふ。即ち山中の果物は多くはちひさいのであつて、それとらんで生えてをるものには椽や栗の木などがまざつてゐる。或るものは紅なること丹砂のやうであり、或るものは黒くてぼつちりした漆のやうである。それが雨や露にうるほされて甘きものも苦いものも一樣に實を結んでゐる。この様な場所をとほるとはるかに「桃源」の仙郷のことがおもはれるのであり、反對にいよいよ自分の處世のまづさをなげかはしくおもふのである。そのうちに鄭州もまぢかになつてきて、高く広い鄭時の岡が眺められる。自分の経過してゐる處は巖崖と深谷とが互に高低出沒してゐる。自分が谷川の水のそばを歩いてゐるのに、自分の僕はあとの崖の木の上の方に居るといふ風である。ふくろふが枯れ桑に鳴いてゐたり、野らねすみ穴だらけの所に兩手をこまぬいたりしてゐる。夜ふけに戰場を經過すると寒さうな月の光が死者の白骨を照らしてゐる。ああ、前年潼關の戰にどうして百萬の官軍があんなに俄に敗散して、殆ど關中の半分の人民を死人にしてしまつたのであらうか。」まして自分はさきに賊軍の中に陥り、いま家へ歸るにあつてはすつかり白髪になつてしまつた。一年目に茅屋へ来てみると妻や子はばろをつぎあはせた衣をきてゐる。慟哭すると松風の聲が吹きめぐり、悲しげな泉の水さへ自分等とともにむせびなきしてゐる。ひごろ愛らしとしてゐた子どもは榮養不良で顔色が雪よりもまつ白である。彼はこのおやちを見て面をあらむけにしてなきだす。みると彼の脚は垢やあぶらがきたなく

ついてゐて、くつたびもはいてゐない。ねだいの前には二人の少女がゐるが、彼女等はほころびをつづりあはせた著物をきてゐるがそのたけはやつと膝がかくれるほどである。彼女等は上著の「ちよつき」をきてゐるがそれは海圖とよるびた繡とりのある切地でつぎあはせてある。圖の波濤はひきさかれてゐるし、繡は模様が位置がうつつて曲りくねつてゐる。すなはち圖の天吳の繡、繡の紫鳳の状、などが「ちよつき」の上であちこち顛倒してみえてゐる。これをみては自分はむねのうちがきもちわるくなつて、はいたり、くだしたりして、二三日は臥てしまつた。どうして自分には汝等が寒がつてふるへてゐるのを救ふことのできる囊中の帛がないのであらうか。それでもおしろいや眉墨をいれた包みものがほどかれるやら、かいまきや、ひとへ寝まきもだんだんとならべられ、瘦せた妻も面に光りがあるやうになり、智慧はのゆかぬむすめたちも自分自身で頭の髪をくしけづる。むすめどもは母のすることならなんでもまねをして、朝のおつくりにも手あたりしだいになにかかほになすりつける。ややしばらく時をつひやしてべにやおしろいをつけるが、できたところを見るとまぬけたはばびろのかき眉ができてゐる。自分は生きてかへつてこども等に對すると餓も渴も忘れるほどである。彼等がものめづらしげに自分に何かをたづねて、たがひに争うて自分のほひげをひつばつたりするが、だれがすぐにそれをどなりつけることができやうか。一方に賊軍の中に陥つてゐたときの愁のことをかんがへれば現在のがやがやかましいぐらゐることは自分の甘んじて受ける所のものである。家へ

かへりたての自分はこんなことでまあ自分のところを慰めてゐる。暮しむきのことなどどうして口からだせるものではない。」我が君にはまだ兵塵をさけて他方においてになる、いつになつたら兵卒を訓練することをやめることができるだらう。それでも上を仰いでみると天の色もこれまでとかはつた様だ。そぞろに兵亂の悪氣も散らばる様な氣がする。西北の方から陰氣な風が吹いてきた。その風はものがなしく回紇にくつついてきたのである。回紇の王は唐の官軍を助けたいと願ひでた。回紇の習俗は馳突がうまい。それが我が唐へ五千人の兵を送り、馬一萬匹を驅つてよこした。彼等は少壯なものを貴ぶ習慣で、彼の國の四方の者はその勇決に服従してゐる。彼等の用ふる者はみな鷹のあがるが如く勇猛であり、敵軍をうち破ることは矢のはいよりもはやい。世論は回紇などを使つてはと後難をおそれて氣を奪はれ様としてゐるが、我君のみ心では平氣で彼等の援助をまつてをられる。」今後は伊水洛水の地方(洛陽)は掌中の物を指す様にたやすく回收することができやう。長安も抜きとるほどのものがなくなつたやすく抜けるであらう。官軍は進んで賊の根據地まで深く攻め入らうとねがひでゐる、銳氣を蓄へて回紇とともに出發するがよろしい。このたびの舉は青州徐州の方面を開くことになるであらう。また恒山・碣石をも略取することになるであらう。大そらには霜露がつもり、天地の正氣がきびしいものがある。胡賊を亡すときには今の禍は轉じて福となるであらう。胡賊を擒にするときには宜軍の勢もできあがるであらう。胡賊の運命はどうしてながつづきできるものか、人間の

大道は斷絶してはならぬはずである。」おもふに、前年都にて俄の出奔の事變が起つたとき、朝廷でとられた御處置は昔の事とはちがつてゐた。我が朝では姦臣(楊國忠)は刑罰に處せられ、そのなかまの惡黨もおつばらひらさされてしまつた。諸君は夏殷の衰へたとき、宮廷の中で御自身に褒姒・妲己の毒婦を誅したまうたことを聞かないか。(楊貴妃は玄宗御自身が誅せられたではないかの意。)さうして周や漢は再び興ることができた。宣王といひ光武といひ豫想せし如く果して明哲の君主である。(唐は再興して、新君肅宗皇帝は明哲であるの意。)まことに桓桓と勇武である、彼の陳將軍は。彼は天子から授けられた鉞をついて忠義ないさをしを奮うた。あのときもしおまへが居なかつたならば唐の人民はみんな今見るやうな安泰なものであることができなかつたであらう、おまへのおかげで今も我が唐の國はいきることができるのである。」長安にある大同殿はものさびしくある。白獸圖はひつそりしてゐる。その都にゐる人たちは早く天子の御旗がおかへりになる様にとながめてをり、その希望のやうに帝運降興のめでたい氣が行在所の方から御所の金闕に向つて起りつつある。我が唐の皇室御先代の山陵にはもとより祖宗の神靈が存在してござる、それに對する御子孫皇帝の灑掃の禮數は決して缺くことがない。我が唐の基礎をお置きになつた太宗の帝業はそのうゑつけ立てられたことは廣大であり且つ終始をつらぬいて後後までもとほるのである。唐の國運が中絶することはない。

行次昭陵

舊俗疲庸主。羣雄問獨夫。
 讖歸龍鳳質。威定虎狼都。
 天屬尊堯典。神功協禹謨。
 風雲隨絕足。日月繼高衢。
 文物多師古。朝廷半老儒。
 直詞寧戮辱。賢路不崎嶇。
 往者災猶降。蒼生喘未蘇。
 指麾安率土。盪滌撫洪鑪。
 壯士悲陵邑。幽人拜鼎湖。
 玉衣晨自舉。鐵馬汗常趨。
 松柏瞻虛殿。塵沙立暝途。
 寂寥開國日。流恨滿山隅。

行くゆく昭陵に次る

舊俗庸主に疲る、羣雄獨夫を問ふ。
 讖は歸す龍鳳の質、威は定む虎狼の都。
 天屬堯典を尊び、神功禹謨に協ふ。
 風雲絶足に隨ひ、日月高衢に繼ぐ。
 文物多く古を師とす、朝廷半老儒。
 直詞寧ぞ戮辱せられむ、賢路崎嶇たらず。
 往者災猶降る、蒼生喘ぎて未だ蘇せず。
 指麾率土を安んじ、盪滌洪鑪のごとく撫す。
 壯士陵邑に悲しみ、幽人鼎湖に拜す。
 玉衣晨に自ら舉る、鐵馬汗して常に趨す。
 松柏に虚殿を瞻、塵沙に暝途に立つ。
 寂寥たり開國の日、流恨山隅に滿つ。

【字解】

【一】 燕俗 唐以前の歴代の民風をいふ。【二】 疲庸主 庸主とは凡庸の君主、六朝以来の愚なる天子をさす、疲とは弱敏すること、つかれてやぶれる。(或はいふ、庸主、獨夫ともに隋の煬帝をさすと。)【三】 羣雄 多くの英雄、隋末に天下を一統せんと起つた李密・竇建德等をさす。【四】 問獨夫 問とはその罪を問ふこと、獨夫とは天子たる資格なき單獨のなと、「孟子」梁惠王下に「夫村とあり、尙書」秦誓下に獨夫受とみゆ。此句の獨夫は隋の煬帝をさす。【五】 讖 豫言の辭、唐の太宗四歳のとき書生あり、之を見て曰く、龍鳳之姿、天日之表、年將二十、必能濟世安民と、書生、太宗の未來について豫言せしなり。【六】 龍鳳質 上の書生の言にみゆ、太宗の美質をいふ。【七】 威 太宗の武威。【八】 虎狼都 秦の都長安をいふ、二解あり、一は「史記」蘇秦傳の秦虎狼之國也を引く、一は天官書の西宮、參爲白虎、東一星曰狼に據り、秦は虎狼星の分野にあたるを以て虎狼都といふととく、虎狼を實獸とみるか星とみるかなり、いづれにても通すべし。【九】 天屬 天然自然の血屬をいふ、父子の關係をさす、これは唐の高祖と太宗の間から、父たる高祖が子たる太宗に帝位を譲られしをさす。【一〇】 神功 神功、尙書「尙書」の堯典篇にては帝堯が賢人たる舜に位を禪りしことを書きたり。太宗は長子ではなく弟なれども賢なるゆゑ高祖より位をゆづられたといふなり。【一一】 協禹謨 此は堯典の禹謨をさす。太宗の人力以上の功。【一二】 協禹謨 「尙書」の大禹謨に、禹の功をのべて、九功惟敘といへり、太宗の舞樂にも七德九功舞あり、これ禹謨にかなふなり。【一三】 風雲隨絶足 絶足は絶足に同じ、駿馬をいふ、太宗をたとへていふ、風雲は諸臣をたとへていふ、諸臣みな風雲の會に乘じて太宗にしたがふ。【一四】 日月繼高衢 これば日月の光りを高衢に於て繼ぐ意ならん、高衢は天上の路なり。太宗が高祖の徳光をつぐをいふ。【一五】 文物 唐の國家の制度文物なり、雅樂を製し、律令を定め、封建を議する等、みな文物なり。【一六】 師古 古代にのりとする。【一七】 半老儒 半分以上は老いたる儒者なり、これは虞世南等の十八學士等をさす。【一八】 直詞 直言して諫むること、王珪・魏徵の諫めのことき是なり。【一九】 老 なんぞ。【二〇】 崎嶇 刑せられづかしめられる。【二一】 賢路 賢人の進む路。【二二】 不崎嶇 崎嶇は道路けはしきさま、崎嶇たらずとはけはしきなきこと、太宗は馬周・劉子翬等を擧げ用ひたり。【二三】 往者 さまには、貞觀の初年をさす、隋末に大水あり、餘野にみちしが、貞觀の初に至りてもしきりに水旱あり。【二四】 災猶降上にみゆ。【二五】 蒼生 人民。【二六】 喘 あへぐ。【二七】 蘇 よみがへる。【二八】 指麾 はたにてさしまれく、臣下を御するを

いふ。【一】率土 土にそひたる處、すべての土地、天下。【二】豐登 うごかしそそぐ、きたなきものをふりうごかしてあらふ、豐或は高に作る。【三】撫洪鐘 洪鐘のごとく撫するなり、洪鐘は大なる火をもやすらひ、造化自然をたとへていふ、撫は愛してなでさするなり、歐陽修曰く、此句は謂、陶成天下、如洪鐘と。以上「往者」以下の四句みな太宗の事として説きたり、朱鶴齡は「往者」二句を玄宗の天寶の災とし、「指麾」二句を希望とみなし、今かかる功を爲すもの無きを歎すといへり、一説に充つべし。【四】壯士 昭陵を守る武士をいふ。【五】陵邑 昭陵の地をいふ。【六】幽人 幽静な人、作者自らいふ。【七】拜 禮拜する。【八】鼎 鼎 黃帝が天に昇りし地、昭陵をたとへていふ。【九】毛 玉衣(一句) 玉を金絲にてつづり綴のごとくせる衣、昔漢の高祖の廟から御衣が出て殿上に舞ひたる話あり。【一〇】鐵馬(一句) 鐵馬はよろほつたる馬、安祿山事蹟に潼關の戦に官軍敗れ、賊將崔乾祐といふもの白旗を領し左右を引いて驟突せしに、黃旗軍數百隊出でてきて崔が軍とたたかふこと一度ならず。後日昭陵より奏していふ、當日靈宮の前の石人石馬、汗流れたり。【一一】玉衣 「鐵馬」二句は太宗の神靈存してかかる靈異ありといへるなり。【一二】松柏 陵樹なり。【一三】塵 ちり。【一四】虚殿 人の居らぬ殿。【一五】塵沙 すなほこりのなごみ。【一六】冥途 くらがりのみち。【一七】寂寥 ひっそり。【一八】開國日 開國は太宗が唐の國家をはじめて開設するをいふ。日とは時をいふ、其の時は已に遠く去りて今はひっそりとしてある。【一九】流恨 ただよへるうらみの念。【二〇】山隅 山陵の四隅。

【題義】 鄜州へ歸る途すがら昭陵のほとりにやどりて作る。昭陵は唐の太宗の陵なり。陝西省西安府醴泉縣の西北六十里九嵎山に在り。封内周圍百二十里、陪葬せらるるもの諸王七、公主二十一、妃嬪八、宰相十二、丞郎三品五十三人、功臣大將軍等六十四人。太宗の乗りし六駿の石像は陵後にありしが今は持ち出だされたり。又、陵そのものは「唐會要」に「昭陵は九嵎の層峰に因りて、山の南面を鑿ち、深さ七十五丈、玄宮を爲る。巖に傍ひ梁を架して棧道を爲る、懸絶すること百仞、繞回すること二百三十歩にして始めて玄宮の門に達す。頂上にも亦遊殿を起す」とあるによりて大略をうかがふことを得べし。

【詩意】 歴代の愚な君主がつづいたため在來の民風はつかれやぶれてきた。そこで多くの英雄たちが起つて帝徳を失ひ一人とも見なすべき隋の煬帝に對してその罪を問ふの師をした。その中で未來の天子たるべしとの豫言は龍鳳の資質をそなへた我が唐の太宗に歸し、太宗の武威は虎狼の國ともいふべき地方の都即ち長安の地方を平定せられた。太宗は高祖に對しては血屬は父子であつてしかも「堯典」の趣旨を尊んで賢者に位をゆづるといふ仕方をとられたし、太宗の人力以上の功は「大禹謨」にしるされてゐる禹の功にもかなうてゐる。高村逸足ともいふべき太宗がたちあがられると風雲に乗じて起つたいろいろの臣下が之につきしたがうた。さうして太宗は天路にかがやく日月の光をついで此の世を照された。太宗の爲されかたは文物制度のうへでは多く古代の良法を師法とせられ、朝廷に用ひらるる人人は半以上は老儒者であつた。その時にはいくら直言をして諫めても刑罰にされはづかしめをうけるといふことはなく、賢人が仕進する路はちつともけはしくなくすらすらとほることができた。さきに隋末に於て人民たちはなんぎにあうて息ぐるしくあへぎつつあつてよみがへるには至らなかつたのに、太宗が出現せられて羣臣を指麾して全天下を安んせられ、從前の汚濁をあらひきよめて世界をあたたかい大なるあろりの様に愛撫せられた。今自分はこの太宗の御陵のほとりをと

ほると、御陵の番兵は悲しさうにしてゐる、自分はここにつつしんで禮拜をささげる。太宗の神靈は天上におはすが寢殿に藏してある玉衣はひとりで晨に舞ひあがり、武裝した石刻の馬も活きてゐて汗をながしていつもはしつてゐるかとおもはれる。自分は松柏のたちならんでゐるあたりに人なき御殿をみあげ、沙ほこりのなかに夕ぐれの途にたたすんでをると、太宗のこの國をお開きになつた當日は遠き過去となつてさびしく、ただあふれる恨の念が山陵の四隅にいつばいになるばかりだ。

重經昭陵

重ねて昭陵を經

草味英雄起謳歌曆數歸

草味英雄起る、謳歌曆數歸す。

風塵三尺劍社稷一戎衣

風塵三尺の劍、社稷一戎衣。

翼亮貞文德丕承戡武威

翼亮文德を貞しくす、丕承武威を戡む。

聖圖天廣大宗祀日光輝

聖圖天のごとく廣大に、宗祀日のごとく光輝あり。

陵寢盤空曲熊羆守翠微

陵寢空曲に盤る、熊羆翠微を守る。

再窺松柏路還有一作五雲飛

再び窺ふ松柏の路、還た見る五雲の飛ぶを。(還た五雲の飛ぶ有り。)

【字解】「草味」馬屯封の象辭に天道草味とみゆ、草味は草創草昧なり、草あれ、光、明かならざるをいふ、隋末世亂れて混

沌たりし時をさす。【三】英雄 草の秀でたるものを英雄といふ、すぐれたる人物を英雄といふ、ここは太宗をさす。【四】謳歌 その人の徳をうたにつくりてうたふこと。唐の民が堯の子を謳歌せしめて舜を謳歌せしこと、孟子「萬章上」にみゆ。【五】曆數 堯曰篇にみゆ、天位之列表と注す、天子たるべき順位なり。【六】歸 太宗に歸著する。【七】風塵 戰亂によりおこるかぜほこり。【八】三尺劍 漢の高祖三尺の劍を提げて天下を取る。太宗も亦かくのごとし。【九】社稷 天下をいふ。【一〇】一戎衣 尙書「武成篇」に一戎衣天下大定とみゆ、周の武王が「たび戎衣(軍服)をきて殷の紂王をうちほろぼしたにやつて天下が大に定まりたりといふなり、太宗も亦かくのごとし。【一一】翼亮 たすけ、たすく、太宗が高祖を輔佐せしこと。【一二】貞文德 貞は正しくして固きなり、固く守りてかはらぬなり、文德は平和の徳なり、「尙書」君牙、「孟子」滕文公下に丕承戡武王烈とみゆ。周の武承 丕は大なり「大に」とは敬語なり、承とは先代の意をうけること、「尙書」君牙、「孟子」滕文公下に丕承戡武王烈とみゆ。周の武王の功烈は文王の意を繼承したりといふなり、太宗も亦かくの如し。【一三】戡武威 戡は「みさむる」、鳥が羽をすばめること、その標に武力の威をとりかたづけてしまふ。【一四】聖圖 太宗のはかりこと。【一五】天廣大 天のごとく廣く大なり。【一六】宗祀 宗としてまつること、宗とは祖について大功ある君としてみるをいふ、後嗣の天子が太宗をまつるをいふ。【一七】日光輝 日のごとく光輝あり。【一八】陵寢 山陵・寢廟なり、廟は木主を藏し、寢は平生の衣冠等を藏する建物。【一九】盤 わたかまる、建築物の曲折して立つをいふ。【二〇】空曲 人無き山のくま。【二一】熊羆 くま、ひぐまの様なつよい番兵。【二二】守 番を守る。【二三】翠微 翠微 山の半腹以下をいふ、空気がみどりにたちわたる處なるを以ていふ。【二四】再窺 再とは第二回なるを以ていふ。【二五】還 有、還見 有、見、いづれにても通ずるも余は見の字を受す。【二六】五雲 五色の雲。

【題義】第二回に昭陵の地を經過せしとき作る。此詩は已に鄜州に到着の後、更に鄜州を發し長安に赴かんとするとき作れるものにして、時は後に屬すれども同じ昭陵の詩たる關係にて前詩の次に録しおかれしものならん。

【詩意】隋末世が亂れて混沌としてゐた草わけの時に英雄（太宗）が起つて、その人は世の人から徳をうたはれ、天子の位をふむべき順位がその人に歸した。その人は兵馬の塵の間に三尺の劍を提げてたち、一たび軍服をつけて社稷を安んずるに力をつくした。それから父たる高祖をたすけて文の徳をかたく守り、高祖の意を繼承して自己の世には武力の威を全くとりかたづけしてしまつた。その生時のはかりごとは天の如く廣大であり、その死後まで中興の宗としてあがめらるるおまつりは太陽のごとく光輝がある。いまここは御陵、寢廟がさびしき山のくまわに盤つてをり、熊羆の様な兵士が山の半腹をみまもつてゐる。自分は前同もここをとほつたが、さらに第二回にきて松柏のしげつてゐる御陵道をうかがひみるに、やはり五色の雲が飛んでゐるのをみとめるのである。

彭衙行

彭衙行

憶昔避賊初北走經險艱
夜深彭衙道月照白水山
盡室久徒步逢人多厚顏
參差谷鳥吟不見遊子還

憶昔昔賊を避けし初、北に走つて險艱を経たり。
夜は深し彭衙の道、月は照らす白水の山。
室を盡くして久しく徒步す、人に逢うて厚顔多し。
參差として谷鳥吟す、見ず遊子の還るを。

癡女饑咬我啼畏虎狼聞
懷中掩其口反側聲愈噴
小兒強解事故索苦李餐
一旬半雷雨泥濘相攀牽
既無禦雨備徑滑衣又寒
有時經契濶竟日數里間
野果充糲糧卑枝成屋椽
早行石上水暮宿天邊煙
少留同家窪欲出蘆子關
故人有孫宰高義薄曾雲
延客已噉黑張燈啓重門
煖湯濯我足剪紙招我魂
從此出妻孥相視涕闌干

癡女饑えて我を咬む、啼いて畏る虎狼の聞こゆるを。
中に懐きて其の口を掩ふ、反側して聲愈々噴る。
小兒強ひて事を解す、故らに苦李を索めて餐ふ。
一旬半雷雨、泥濘相攀牽す。
既に雨を禦ぐの備無く、徑滑かにして衣又寒し。
時有つてか契濶たるを經、竟日數里の間。
野果を糲糧に充て、卑枝を屋椽と成す。
早には行く石上の水、暮には宿す天邊の煙。
少しく同家窪に留まり、蘆子關を出でむと欲す。
故人孫宰有り、高義曾雲に薄る。
客を延くとき已に噉黒なり、燈を張りて重門を啓く。
湯を煖めて我が足を濯はしめ、紙を剪つて我が魂を招く。
此從り妻孥を出だす、相視て涕闌干たり。

衆難爛漫睡喚起露盤殮。衆難爛漫として睡る、喚び起して盤殮に露はしむ。
 誓將與夫子永結爲弟昆。誓つて將に夫子と、永く結びて弟昆と爲らむとすと。
 遂空所坐堂安居奉我歡。遂に坐する所の堂を空しくして、居を安じて我が歡を奉ず。
 誰肯艱難際豁達露心肝。誰か肯て艱難の際、豁達心肝を露はさむ。
 別來歲月周胡羯仍構患。別來歲月周る、胡羯仍患を構ふ。
 何當有翅翎飛去墮爾前。何か當に翅翎有つて、飛び去つて爾が前に墮つべき。

【字解】【一】憶昔 昔とは前年至德元載をさす。【二】避賊初 奉先より白水に往きしことをいふ。【三】彭衙 題意の下にいたす。【四】白水 上に同じ。【五】盡室 全家こぞつて。【六】多厚類 厚顔は面皮あつし、恥知らぬさま、世亂れて家族離散するもの多き時に自己のみ全家をろつて放しつづつあることを心にばち謙遜してかくいふ。【七】參差 たがひちがひにとよさま。【八】遊子 一般の行旅の人をさす。【九】癡女 頑是なきむすめ。【一〇】咬 かむ、かじりつく。【一一】懷中 胸の内にだきこむ。【一二】其口 むすめの口。【一三】反側 あちらへ向きかへる。【一四】嘆 いかる。【一五】強解事 牛わりのこと、わかつてゐるくせにわかつたとする。【一六】故 ……とさらに、わざと。【一七】素 ともむ。【一八】苦辛 にかいすも。【一九】餐 くらふ。【二〇】一句 十日間。【二一】泥濘 わかるみ。【二二】攀牽 ものにつかまり、又はひつぱりあふ。【二三】兼雨備 雨をふせぐよしい。【二四】徑 こみち。【二五】契濶 動苦する貌、契濶たるを契とはいくにもつづいてなんぎすること。【二六】竟日 一日いつばい。【二七】野果 野生のくだもの。【二八】穢穢 かつ。衆を一に録(ほしいひ)に作る。【二九】車枝 ひくくまがつてゐる枝。【三〇】成屋棟 やれのたるきとする、これは家をかまへるに非ず、樹枝の下にやどるをいふ。【三一】早行 早は朝はや

く。【三二】石上水 漢のいほまの水。【三三】天邊煙 高峰のけむり。【三四】少留 しばらく滞在する。【三五】同家窪 白水縣の郷村の名ならん、孫宰の居る所。【三六】盧子開 鄆州よりさらに北にあり、實武へ達するの路、已に「塞盧子」の詩の條にいたす。【三七】故人 ふるなじみの人。【三八】孫宰 黃希の説にては三川の宰なりとせり、諸家多く姓は孫、宰は名とみる。【三九】高義 義理のたかいこと。【四〇】薄 せまる。【四一】會雲 かさなれるくも、會、層、同じ。【四二】延客 お客をこしらへとひく、客は作者なり。【四三】睡 すぐらがり。【四四】張燈 あかりを設ける。【四五】啓重門 義重にもなつてゐる門をひらく。【四六】煖 湯 おゆをわがす。【四七】濯我足 作者の足をあらはせる。【四八】剪紙 紙をばさみにてきり、「はたしをつくり魂をまねく式に用ふ。蓋し七夕のとき竹の枝に綵箋をつけるたぐひならんか。【四九】招我魂 我とは作者をさす、杜詩往往招魂をいふ、これは「生き霊」をまねくをいふ、生者の魂散じて四方にあるによりて之をよびかへすなり。【五〇】從此 それから。【五一】出妻孥 作者の妻子をいだして孫宰に面會させる。【五二】相親 たがひによくみあふ。【五三】關干 あふれてながるる貌。【五四】衆難 多くの幼少なることし。【五五】彌漫 れむりのまつさかりなるさま。【五六】喚起 よびおこす。【五七】露 そのめぐみにうるほほしめる。【五八】盤殮 盤は大皿、殮は食事。【五九】誓將(二句) 此二句は孫宰の語なり、夫子とは孫宰より作者をさす語、弟昆の昆は兄なり、弟昆は兄弟をいふ。【六〇】空 からにしてあけてくれる。【六一】所坐堂 主人が現に坐してゐるさしき。【六二】安居 居どころを安穩にして。【六三】奉我歡 我我に我我の歡ぶことをあたへてくれる。【六四】誰肯 次句までかかる、反語なり、だれかそんなにすることを承知しやうか、するものはない。【六五】艱難 世事のなんぎなこと。【六六】豁達 ひろびろと。【六七】露心肝 心のおくそこまで他人にだしてみせる。此句までが前年の事なり。【六八】別來 わかれてこのかた。【六九】周 ひとめぐりする。前年の夏より今年の秋までにて一周なり。【七〇】胡羯(一句) 史思明の兵太原に寇し、安慶緒、尹子奇をして雋陽に赴かしめし等のことをさす。【七一】仍 なほ、やつぱり。【七二】構患 しんばいことをこしらへてゐる。【七三】何當 何は何時なり。【七四】翅翎 つばき、はね。【七五】爾 汝、孫宰をさす。

【題義】前年彭衙の地を過ぎしことを追憶して作れる詩なり。彭衙は漢代の縣の名、陝西省同州府白

水縣の東北六十里にあり、白水に同家窪あり、孫宰なるもの（杜詩の中に孫宰、王宰などいへる宰はその人の名なるや、邑の長をいふものなるや判明せず）其地に居る。作者前年鄭州に赴き更に蘆子關をへて靈武に達せんとせしとき、白水を経て孫宰の厚遇を受く。今年（至徳二載秋）鄭州の家を見舞ふにあたりて白水の西を過ぎてしかも孫を訪ふ能はざるによりて往事を追憶して此篇を作る。但、途上の作なるや、鄭州に著後の作なるやは明かならず。

【詩意】今もおもふ、前年賊を避けたころ北に向つて走つてなんぎな處を經過した。彭衙の道に夜は深けて、白水の山山を月が照らしてゐた。あのとき自分たちは一家内そろつてながくかちあるきを深けてゐたので人にあへばあつかましい様なきもちがした。谷まの鳥はたがひちがひにとんでないてゐるが、だれも他に旅人が家路へもどつてくる様なものを見うけない。智慧はのゆかぬ娘が腹がへつたというて自分にかじりつく。なきたてては虎や狼の聲がきこえるというてこはがる。自分が胸をあけてだきこんでやりその口をおほふ様にすると身をそむけてかへつていよいよつゝるをだす。また小兒は半わかりでたべることならぬ苦い李をねだつてたべたりする。凡そ十日のうち半分は雷雨がする、みちはぬかるみで、なにかにつかまつたり、手でひつぱりあうたりしてやつとすすむ。雨をふせぐ用意がないうへに小みちはすべり、著物もうすぎである。時としてはなかなかのなんぎをつづける、一日中かかつてやつと二三里しかあるけぬことがある。野生のくだものを「かて」の代りにたべたり、樹木の卑い枝をたるき代りにしてその下でいねたり、朝早くに谷間の水にそうてあるくやら、暮がたに峰のをの天ちかき煙のあたりでとまるやら。自分たちはしばらく同家窪で滞在してそれから蘆子關を出て北進しようと思つた。同家窪にはふるなじみの孫宰といふものがゐてその高義は雲にせまるほどであつた。彼は自分たちを案内してくれたときはもはやうすくらがりであり、あかりをつけて幾重かの門をあけてくれた。さうしてお湯をわかつて我我に足をあらはせ、紙をきつて我の生き靈をよびかへしてくれられた。それから自分は妻子をだして彼にひき合せたが、お互にみあつてともに涙をながした。子どもたちをみるとみんなさかんによくねむつてゐる。それをよびおこして御飯のもてなしにうるほはせる。そのとき孫宰は自分にむかつて「誓つてあなたと永く交りをつなぐ兄弟となりませう」というて、とうとう自己の坐してゐる座敷をからにあげて自分たちの居を安かにして我我がなるたけよろこぶ様にとしてくれられた。このなんぎな時節にだれが孫宰の様にからりと自己のはらのなかをうちあけてよう親切をつくしてくれるものがあらうぞ。おもひまはせばあなたと別れて以來まる一年ばかりはたつた。が、胡賊等はやつぱり患難をしでかしてゐる。いつになつたら自分のからだにはねがはえて、飛んでいつてあなたの前におちることができらうであらうか。

喜聞官軍已臨賊境二十韻

胡騎潛京縣。官軍擁賊壕。
 鼎魚猶假息。穴蟻欲何逃。
 帳殿羅玄冕。轅門照白袍。
 秦山當警蹕。漢苑入旌旄。
 路失羊腸險。雲橫雉尾高。
 五原空壁壘。八水散風濤。
 今日看天意。遊魂貸爾曹。
 乞降那更得。尙詐莫徒勞。
 元帥歸龍種。司空握豹韜。
 前軍蘇武節。左將呂虔刀。
 兵氣回飛鳥。威聲沒巨鼉。
 戈鋌開雪色。弓矢向秋毫。

胡騎京縣に潛み、官軍賊壕を擁す。
 鼎魚猶息を假す、穴蟻何に逃れむと欲する。
 帳殿玄冕羅り、轅門白袍照る。
 秦山警蹕に當る、漢苑旌旄に入る。
 路は羊腸の險を失す、雲横はりて雉尾高し。
 五原空しく壁壘、八水風濤散す。
 今日天意を看るに、遊魂爾が曹に貸す。
 降を乞ふも那ぞ更に得む、詐を尙ふは徒に勞する莫らむや。
 元帥龍種に歸し、司空豹韜を握る。
 前軍蘇武が節、左將呂虔が刀。
 兵氣飛鳥を回へす、威聲巨鼉を沒せしむ。
 戈鋌雪色開き、弓矢秋毫に向ふ。

天步艱方盡。時和運更遭。
 誰云遺毒螫。已是沃腥臊。
 睿想丹墀近。神行羽衛牢。
 花門騰絕漠。拓羯渡臨洮。
 此輩感恩至。羸俘何足操。
 鋒先衣染血。騎突劍吹毛。
 喜覺都城動。悲憐子女號。
 家家賣釵釧。只待獻香醪。

天歩艱方に盡く、時和運更に遭ふ。
 誰か云ふ毒螫を遺すと、已に是れ腥臊に沃ぐ。
 睿想丹墀近く、神行羽衛牢し。
 花門絶漠に騰り、拓羯臨洮を渡る。
 此の輩恩に感じて至る、羸俘何ぞ操るに足らむ。
 鋒先ちて衣血に染む、騎突きて劍毛を吹く。
 喜は覺ゆ都城の動くを、悲は憐む子女の號ぶを。
 家家釵釧を賣り、只だ待つ香醪を獻するを。

【字解】 一、胡騎、胡賊の騎兵。二、潛、ひそむ、のがれかくれる。三、京縣、都近くの縣。四、官軍、廣平王の軍ある軍をさす。五、擁、賊の據つた要害(ほり)を我物としかかへまほる。六、鼎魚、かなへの中で煮られる魚、賊の危きことをたとへていふ。七、假息、いきふくことをかき與へてある、しばし生命をおつけておくこと。八、穴蟻、穴のなかのあり、これも賊の危きなたとへていふ。九、何逃、何は何處なり。一〇、帳殿、テントばりの御殿、鳳翔の行在所をいふ。一一、轅門、つらなる、ならぶこと。一二、玄冕、くろきかんむり、公卿の禮冠なり。一三、警蹕、軍門なり、軍中の門は轅(くるまのながえ)を以てつくる。一四、照、てりががやく。一五、白袍、白きうばぎ、これは援助に來た回紇のきる衣なり。一六、秦山、長安附近の山をいふ。一七、當蹕、當(あたる)とは警蹕すべき地位にあるをいふ、警蹕は天子の出入に道路上の人拂ひをすること、出づ

るには警と稱し、入るには歸と稱す。【一八】漢苑 長安にある唐の御苑をいふ。【一九】入旌旄 旌旄は官軍のはた、入るとは「はた」のたてらるる範圍内にはひるをいふ。【二〇】路失 失はこれまで有りしも今はなくなること。【二一】羊腸散 羊のばらわたのやうにうねうねと曲つた路のある山險。【二二】雲橫 この雲は實物に非ず雉尾扇のむらがるなたとへていへる辭。【二三】雉尾高 天子の大駕の由儀には雉尾障扇・小圓雉尾扇・方雉尾扇・小雉尾扇等のたぐひあり。雉尾とは雉の尾にて作りたる「うちばし」なり。【二四】五原 長安附近の五つの原（高地）をいふ。畢原・白鹿原・少陵原・高陽原・細柳原これなり。【二五】空壁疊 とりでだけがいたづらに存す、無用となり功をなさぬこと。【二六】八水 涇・渭・澇・滻・滹・灃の八を關内八水と稱す。【二七】散風濤 散とは集の反對、今までは風濤が多く集まつてゐたが今は散らばつてなくなつた。【二八】天意 天のこころ。【二九】遊魂 ふらふらしたたましひ。【三〇】貨爾曹 爾曹は汝等なり、汝等とは賊軍をさす、貨はかしたあへる。【三一】乞降 降参をたのむ。【三二】那更得 どうしてできやうぞ、降参もできぬとは必ず誅殺せらるべきをいふ。【三三】尙許 いつはりをたふとぶ、官軍に對し詐略を用ふること。【三四】莫徒勞 莫は反語、徒勞はむだばねなること。【三五】元帥 廣平王をいふ。【三六】龍種 皇族なるをいふ。【三七】司空 郭子儀なり、時に副元帥となる。【三八】豹額 支那の兵法の書「六韜」は文・武・龍・虎・豹・犬の六部に分つ、豹の部が豹額なり。【三九】前軍 前鋒なり、李嗣業が軍をいふ。【四〇】蘇武節 漢の武帝の時、蘇武は匈奴に使し、歸りて典屬國（外國掛り）の官となる、李嗣業が軍、蕃夷の兵を率ゐるを以て蘇武を以て比す、節は使者のはた。【四一】左將 朔方左前兵馬使僕固懷恩をいふ、香積の戰に懷恩は賊を撃ちて殆ど之を討滅す。【四二】呂虔刀 晉の呂虔、徐州の刺史として王祥を召して司馬となす、虔佩刀あり、刀工之を相していふ、三公の服すべきものなりと。虔乃ち之を王祥に與ふ。懷恩亦公位に居るべきほどのものなるをいふ。【四三】兵氣 兵は官軍の武器をいふ、兵氣は武器精銳の氣なり。【四四】回飛鳥 回は回遊せしむるをいふ。【四五】威聲 官軍のつよいといふ評判。【四六】沒瓦蓋 沒とは水の底に深くしづんでしまふ。龜はうみがめ、賊の魁をたとへていふ。【四七】戈鋌 鋌は小き矛。【四八】天色 刃のいろをいふ。【四九】向秋毫 秋毫は秋の獸毛、秋は毛すぢほそし、向秋毫とはどんな微細なものにも中るをいふ。【五〇】天歩 「白華」の詩に天步難とみゆ、天の歩みといふは時運といふが如し、國家の運命なり。【五一】厭 なんざ。【五二】時和 四時陰陽の氣よく調和すること。【五三】運更運 そのめぐりあはせにまたあふ。【五四】遺毒孽 遺は「のこす」、殘存すること、毒孽はどく蟲のほり、賊の害をさしていふ。【五五】沃醴醴 沃とは熱湯をそそぎかけること、醴醴はなまくさきなり、なまくさしとは賊をさす。【五六】睿想 天子のみおもひ。【五七】丹墀 御所のおかすなを敷いた土えん。【五八】神行 天子の行をいふ。【五九】羽衛 羽をかざつたはたましひのなをたてたてた警衛。【六〇】牢 かつし。【六一】花門 回紇をさす。【六二】騰 勢よく飛びあがる。【六三】絶漢 遠き沙漠。【六四】拓羯 拓を或は拓に作る、拓羯は夷語、戰士の義なりと、これは安西（唐時交河城或は龜茲に都護府を置けり）の兵をさす。【六五】臨洮 甘肅省鞏昌府岷州治。【六六】此輩 花門・拓羯をさす。【六七】恩 唐の天子の恩。【六八】萬俘 つかれたるとりこ、賊中の老幼のとりこをいふ。【六九】操 執なり、とらへること。【七〇】鋒先 先は先だちすすむこと、鋒は官軍の銳鋒。【七一】騎突 突は突き出ること、騎は官軍の騎兵。【七二】劍吹毛 干將の名劍は吹く毛、遊べる塵を決つといへり。【七三】喜覺、悲憫 喜は都城の人に、悲は子女に屬す、覺と憫とは作者に屬す。【七四】都城助 都城は長安をいふ。勳はさわぐことの甚しきをいふ。【七五】子女強 男子女兒等の泣きさげふこと、これはなかに戦死者の家族あるをいふ、但し此句は客にして喜覺の句が主なり。【七六】殺劍 かんざし、うでかざり。【七七】只待 ただまつ。【七八】獻 官軍にささげる、たてまつる。【七九】香燭 かんばしきさけ、香を一に春に作る。

【題義】官軍が賊軍の居る地へさしかかつて攻めこまうとしてゐることを聞き喜んで作れる詩。至徳二載閏八月、賊、鳳翔に寇す。崔光遠 崔光遠、時に御史大夫、京、行軍司馬王伯倫等衆を率ゐて賊をふせぎ、勝に乗じて中渭橋を攻め、追撃して苑門に至る。賊の大軍、武功に屯せしもの營を焼いて去る。九月丁亥、廣平王、朔方等の軍及び回紇、西域の衆十五萬に將として鳳翔を發し、壬寅長安城西に至り、賊將安守忠等と香積寺の北、澧水の東に戰ふ。賊大に敗る。首を斬ること六萬。賊の帥張通儒、京城

を棄てて陝郡に走る。癸卯、王の大軍京師に入る。甲辰、捷書、鳳翔に至る。以上は當時の前後の事實なるが、此詩は官軍の形勢益々賊軍を壓迫して長安附近に至りしことをききて作れるならん。

【詩意】胡賊の騎隊等は都近くの縣にもぐりこみ、官軍は賊の據つた塹壕をわがものとしてゐる。賊の境遇は鼎のなかに煮られかけてゐる魚がいきをふくだけの猶豫をあたへられてゐる様である、また穴のなかの蟻でどこへ逃げやうとおもつてゐるか、とてもにげられはすまい。いま鳳翔の行在所のかりごとでは玄冕をつけた公卿がたがならんでをり、軍門には援助に来てくれた同紇兵の白衣がてりわたつてゐる。都近くの山山は我君の行幸の御警蹕あるべきすぢみちに當つてゐるし、都の御苑も官軍の旌のたてらるる範圍内にはひらうとしてゐる。さしてゆく路には羊腸の險阻もなく平な道がひらかれ、御行列にはただ雉尾扇の雲が高く横はるであらう。五原もいたづらに壁壘がのこり、八水も風濤がすつかりなくなつてしまふ。今日天のころをみるにしばしのあひだふらふらした魂を汝等(賊)にかしてゐるのである。いまさら降参をたのんでもできるわけではないし、なにか詐りごとをしてこちらをだまさうとしてもそれはむだ骨折ではなからうか。天下兵馬大元帥の職はかたじけなくも皇族のお方(廣平王(儼))に歸したし、司空(郭子儀)はその副となつて豹韜の軍略をにぎつてをられる。前軍の長(李嗣業)は蘇武の如き節をもち、左將(僕固懷恩)は呂虔の如き刀を佩びてゐる。我が官軍の武器のいかめしさには飛ぶ鳥もおそれてそこから避けて方向を轉ずるし、官軍の威名は大き

なうみがめ(賊のかしら)を水底に沈ませることができぬ。官軍の戈や小矛は雪の様な白い刃をあらはし、弓や矢はどんなけすぢほどのものに向つてもよく射あてる。國運の艱難もやつとこれでなくなり、陰陽二氣の調和する時運にもいちどであはうとしてゐる。毒や蟲の針のやうなわるものどもがまだのこつてゐるとだれがいふか、そんなものはのこらない。もはやなまくさい悪氣にはすつかり熱湯をかけてあらひきよめた様なものだ。我が君のおん考へでは、まもなく御所の丹墀のそばにかへれるとおぼされ、その行幸のときには御警衛の行列がたかくお守りをするとかんがへられる。遠い沙漠に飛騰してゐる同紇、臨洮をわたつて来た安西の拓羯、彼等はいづれも我が君のご恩に感じて援兵にやつて来てゐるのだ、賊黨の強いやつ等を退治すればそれでよいのでなんで老幼ごときつかれたとりこ人などをとらへる必要があらうか。味方の前鋒はまつさきかけて戦衣は血にそまり、味方の騎隊は突出してそのふりかざす劔は吹く毛をきりたつばかりきれあちがよい。かかるありさまだから、戦死者の遺族たる子女等が悲しんで號ぶのはきのどくであるが、都城の人大體は大喜びでその喜びのため満城ゆるぐかと覺ゆるのである。どの家もどの家も婦人たちが釵や釧を賣つて、それで買つた香のいい酒を官軍がはひつて來たらささげてやらうと待つばかりである。

收 京 三首

京を收む 三首

仙仗離丹極 妖星照玉除

仙仗丹極を離れ、妖星玉除を照らす。

須爲下殿走 不可好樓居

須らく下殿の走を爲すべし、樓居を好む可らず。

暫屈汾陽駕 聊飛燕將書

暫らく汾陽の駕を屈す、聊か飛ばす燕將の書。

依然七廟略 更與萬方初

依然たり七廟の略、更に萬方と初めむ。

【字解】【一】仙仗 天子の儀仗、仙の字は天子をさす、仗は儀式のとき執りてならぶたさしものの類。【二】離 去てんから離れ去ること。【三】丹極 去てんをいふ、丹は宮廷に丹泥をぬるを以ていふ、極は蓋し中極の義、天子の位居をいふ、此句は上皇(玄宗)についていふ。【四】妖星 不祥の星、凡二十一種あり。【五】玉除 除は土えん、階下をいふ、玉はうつくしきこと、此句は安祿山についていふ。【六】下殿走 諺に焚悉(星名)入南斗、天子下殿走といへり、梁の武帝之により殿足にて殿より下りて之を驅ひたりといふ。【七】好樓居 「漢書武帝紀に公孫卿が曰く、仙人好樓居」と、此詩句は玄宗と楊貴妃とのことをいふ、玄宗驪山の生活は仙人樓居の生活のことし。【八】暫屈 屈とは地位高きものが身をかがめて卑きことを爲すをいふ。【九】汾陽 莊子に魏が四子を養姑射の山、汾水の陽に見、自然として其の天下を喪へりとの話あり、玄宗の蜀へ出奔せしことを堯が有道の人を見るため汾陽へゆきしことを以てたとへていふ。【一〇】燕將書 燕將を降参させる手紙をいふ。戰國の時、燕の將、聊城を攻め下して之を守り、田單之を攻むるも下す能はず、魯仲連矢に書をくくりて之を城中に射こみたるに燕將感じ泣いて自殺せり、これは官軍より賊將を降らしむるの書をとばすをいふ。【一一】依然 もとどほり。【一二】七廟略 天子は七廟を置く、古昔は廟にて國家の大事についての謀略を定む、故に國謀を廟略といふ。【一三】萬方 天下四方といふも同じ。【一四】初 更始の義、これまでとはやりかたをかへてあたらしくはじむるをいふ。

【題義】官軍の手に長安をとりこみたるにつけて作る。肅宗は至徳元載七月十三日甲子に靈武に於て即位し、制書を以て大赦す。二載十月十九日長安に還る。十月二十八日壬申、丹鳳樓に出御してまた制を下す。制書の下ること前後二回なり、故に詩中に「又下」の語あり。又、生意甘衰白、天涯正寂寥の句によれば作者は鄭州の家に在りて詔を聞くなり。製作時は至徳二載十月末か、十一月初の作。【詩意】妖星の光りが御殿の土えんを照らし、(即ち安祿山等の兵氣が盛なりしために)儀仗が御所から離れられる様になつた。(上皇玄宗はおにげになつた。)かかる際には天子たるものは梁の武帝がした様に御殿からおりてはだして走るといふ風にあるべきであつて、仙人めいて二階住居を好んでゐるといふ風であつてはならぬ。上皇が堯の様に汾陽の駕を屈せられたとてそれは暫時のことであるし、また燕將ともいふべき賊軍の將を降す矢ふみはすこしは發せられてゐることでもある。(やがて天下も平定するであらう。)幸にも我が大唐の廟略は依然として存在してゐる。天子は今後は天下四方とともに従前のしかたをやりなほす様しなければならぬ。

【一】

【二】

生意甘衰白 天涯正寂寥
忽聞哀痛詔 又下聖明朝

生意衰白を甘んず、天涯正に寂寥、
忽ち聞く哀痛の詔、又聖明の朝より下るを。

羽翼懷商老、文思憶帝堯。羽翼商老を懐ひ、文思帝堯を憶ふ。
 叨逢罪己日、灑涕望青霄。叨りに己を罪するの日に逢ひ、涕を灑ぎて青霄を望む。

【字解】 ① 生靈 生きてあることろのなか。 ② 衰白 老衰して頭髮の白きこと。 ③ 天涯 天のはて、鄭州はあなかがゆふ長安よりみて天のはてなり。 ④ 哀痛詔 天子が自らをいたまらるるみことり。 ⑤ 又下 又とは一回にあらぬをいふ。 ⑥ 羽翼、商老 商老は商山の四皓（四人の老人）なり、漢の高祖のとき張良が計にて老人山より出て來りて高祖の太子の輔佐となれり、羽翼とは輔佐となるをいふ、詩意は李泌が廣平王叔の輔佐たらんことをおもふをいふ。 ⑦ 文思 「魏典」の序に見ゆ、智、天地を經緯するに足るを文といひ、智の深きを思といふ、堯の徳をのべし辭なり。 ⑧ 帝堯 玄宗をいふ。 ⑨ 叨 みだりに、謙遜の辭。 ⑩ 罪己 天子が自己を罪せらるること、自分がわろかつたと仰せらるるなり。 ⑪ 灑涕 涕は鼻水。 ⑫ 青霄 天ををら。長安の天をいふ。

【詩意】 自分は生きつつ老衰の境を甘んじて天のはてにさびしくくらししてゐる。このときにはかに我が君の自己をおいたみになる詔が朝廷からまたくだつたことを耳にする。それにつけて四皓の様な人が皇子（廣平王）を輔佐してくれたならばとおもうたり、文思の徳のあらせられた帝堯（玄宗）のこなどをおもふのである。自分はもつたいたなくも我が君が自己を罪せらるるといふ様な時にであうてなみだをそそぎながら都のそらをながめるのである。

〔三〕

〔三〕

汗馬收宮闕、春城鏖賊壕。

汗馬宮闕を收め、春城賊壕を鏖らむとす。

賞應歌林杜、歸及薦櫻桃。

賞は應に林杜を歌ふなるべし、歸るは櫻桃を薦むるに及

雜虜橫戈數功臣、甲第高。

雜虜戈を横ふること數なり、功臣甲第高し。

萬方頻送喜、無乃聖躬勞。

萬方頻に喜を送る、乃ち聖躬の勞するなる無からむや。

【字解】 ① 汗馬 馬にあせなかがす、馬を勞せしこと。 ② 收 賊軍の手からとりをさめる。 ③ 宮闕 長安のこてん。 ④ 春城 明春の長安城。 ⑤ 鏖 けづりて平にする。 ⑥ 賊壕 賊が防禦に掘り置きし「ほり」。 ⑦ 林杜 「詩經」に見ゆる詩篇の名、凱旋する將帥をねぎらふ作なり。 ⑧ 歸 王師の都へもどること。 ⑨ 薦櫻桃 「禮記」月令に天子が仲夏の月に舎桃を庭廟にすすむることを記せり、舎桃・櫻桃は同物にて「さくらんぼ」なり、これはその時節をいふ。 ⑩ 雜虜 回紇諸蕃の官軍を助けしものなさを。 ⑪ 横戈 ほしのままに戈をふるふ、武威をかりてあはるをいふ。 ⑫ 數 しばしば。 ⑬ 功臣 軍功ある武臣。 ⑭ 甲第 天子から功臣に賜はる第一等の第宅、第宅に甲乙の次第あるなり。 ⑮ 送喜 中央へおめでたいといひおくる。 ⑯ 無乃 反語なり、ではなからうか、だらう。 ⑰ 聖躬 天子のおからだ。

【詩意】 兵馬の力で長安の宮闕を回收した。明春にはこれまであつた賊軍の暫壕をなくしてしまふであらう、官軍將士の凱旋するとき之を賞するには「林杜」の詩篇でも歌ふことであらうし、そのかへりつくのは宗廟に「さくらんぼ」を供へる仲夏のころであらう。これまでさまさまのえびすたちが武威をかさにきてあはつたし、功臣も論功行賞で高第宅を賜はつた。これからそんなことがくせ

になりはしないか。いま四方からしきりに喜びをいひやるけれども我が君におかせられては將來のこ
とをおかながへになつて却つてごじしん御勞苦をあそばされてをるのではあるまいか。

【餘論】右作者在鄭州の作とみたるを以て「春城」の句豫擬の言として解きたり、若し此作乾元元年
春の作ならんには實事となる。

送鄭十八虔貶台州司戶傷其臨老陷賊之故

闕爲面別情見於詩

鄭十八虔が台州の司戸に貶せらるるを送る、其の老に臨み賊に陥るの故を傷
み、面別を爲すことを闕く、情詩に見ゆ

鄭公樛散鬢成絲、鄭公樛散鬢絲を成す、

酒後常稱老畫師、酒後常に稱す老畫師と。

萬里傷心嚴譴日、萬里心を傷ましむ嚴譴の日、

百年垂死中興時、百年死に垂とす中興の時、

蒼惶已就長途往、蒼惶已に長途の往に就く、

【字解】「樛」鄭虔、已に前に見

ゆ。「散」罪により官をおとさ

れる。「老」台州司戸、台州は今の

浙江省台州府、司戸は司戸參軍なり。

【臨老陷賊】老年になりて賊軍の
中へおちこみその偽官を受けし事。
嶽山の軍長安へ攻め入りし時虔は功

邂逅無端出餞遲、邂逅無く出餞遅し。

便與先生應永訣、便ち先生と應に永訣するなるべし、

九重泉路盡交期、九重の泉路盡く交期。

かされて賊より水部郎中の官を授け
られたり、至徳二載十二月に賊に陥
りし官は六等に分ちて罪を定む。虔
は死刑たるべかりしを推圖といふも
の教ひにより貶官にせられたり。

【一】故、事のわけをいふ、虔は賊に陥り官を授けられしも風疾(ちうき)にかこつけ市の役人となり潛に賊情を朝廷へ報知せし等の事
あり。【二】面別、直接對面して別れをする。【三】樛散、樛は「莊子」逍遙遊篇に、散木は同書人間世篇に見ゆ、樛は無用の大木の名、
散木とは不材のためうちすてある木をいふ。【四】老朽無用の地にあるをいふ。【五】成絲、しらがのほつれしさまをいふ。【六】
酒後、酒をのみしのち、酔後をいふ。【七】稱、虔が自らいふ。【八】老畫師、虔は詩書畫を善くし玄宗之を三絶とほめられしほど
の人。【九】萬里、台州まで遠ければいふ。【一〇】傷心、作者が心をいためること、詩題の傷其云の傷と同じ。【一一】嚴譴日、き
びしきおしかりを受けし時。【一二】百年、人の一生をいふ。【一三】垂死、虔が死にちかづきつつあること。【一四】中興時、肅宗賊
を逐ひはらひ、帝都をとりもどされし時節。【一五】蒼惶、惶を或は黃に作る。蒼黃、倉皇ともにあわただしき貌。【一六】長途往、長き
旅程へとでかける。【一七】邂逅、であふこと。【一八】無端、無由とおなじ、邂逅無端は無理由邂逅の意、王慎中は此句を不成語
と評したれども必しも然らず。【一九】出餞遲、餞は「はなむけ」、みおくること。遅は時間がおそすぎしこと。此の三字は上の邂逅
無端の原因を説く、ただ詩句は「遅かつたためあへぬ」というのであるも、事實は情に忍びずわざと見送りにゆかさざりしことは題下の文
に見ゆるとほりなり。【二〇】便、すなほち。【二一】先生、虔をさす。【二二】應永訣、應の字推量の辭、永訣は死にわかれをいふ。
【二三】九重泉路、幾層もの泉下、冥途をいふ。【二四】交期、交情の期する所の地なるをいふ。
【題義】鄭虔が台州の司戸參軍に貶せられてゆくのを送る詩である。虔が老境になつて賊軍に陥るに
至つた次第をきのどくにおもひ自分はちかにな面會して別れを告げることをしてしないのだ、自分のこころ

もちはこの詩のなかにあらはしてある。至徳二載十二月、作者已に長安に在りての作なるべし。

【詩意】鄭公は老朽無用の地に居られてその鬢毛はほつれて絲のごとく、酒をのみて後はいつも自分は老いたる晝かきにすぎぬというてをられた。この二匹殿前を蒙つて遠き萬里の地へながされるといふは實にお氣のどくで吾が心をいたましめる、この聖天子の中興せられたためたいてい時節に公の生涯は死になんなんとしてゐるのである。自分を出かけてお見送りすることが遅かつたため自然おあひするにも由が無く、公はもはや長き旅程に就いてしまはれた。このわかれでこれが先生との永久のおわかれとなるのであらうかとおもふが、先生と自分と交情相期するの地はこの現世かぎりではない九重の黃泉の下もまたその地である。

臘日

臘日

臘日常年暖尙遙

臘日常年暖尙遙かなり、

今年臘日凍全消

今年臘日凍全く消す。

侵陵雪色還萱草

雪色を侵陵するも還た萱草、

漏洩春光有柳條

春光を漏洩するは柳條有り。

【字解】(一) 常年 平生の年。

(二) 遙 それまでに距離がある。

(三) 凍 水のこほること。

(四) 侵 ながししのごとく、まげすうちかつこと。

(五) 還 また、萱草もまたの義。

(六) 萱草 うきわすれぐさ、くわんさう。

(七) 漏洩 もらす。

縱酒欲謀良夜醉

縱酒謀らむと欲す良夜の醉、

還家初散紫宸朝

還家初めて散す紫宸の朝。

口脂面藥隨恩澤

口脂面藥恩澤に隨ふ、

翠管銀罌下九霄

翠管銀罌九霄より下る。

【ハ】 柳條 やなぎのこえだ、是は

えだそのものではなく若芽のめぐみ

をいふ。

【ニ】 縱酒 酒をほしいま

まにのむ。

【三】 良夜 祝祭日の

夜なればよきよるといふ。

【四】 還 還

家にかへる。

【五】 散 散

散する。

【六】 紫宸朝 紫宸は殿

敷する。

の名、朝は朝廷の集りをいふ、作者左拾遺の官なれば参朝するなり。【一】 口脂面藥 口につけるあぶら、顔面にのるくすり、これは凍傷を防ぐものとみゆ。【二】 縱 したがふ、まにまにといふこと。【三】 恩澤 天子のおめぐみ。【四】 翠管銀罌 翠管は翠色で飾りし象牙の筒、これは口脂を盛るものならん、銀罌はぎんのかめ、これは面藥を盛るものならん。【五】 九霄 九重のあなぞら、宮中をさしていふ。【六】 臘酒の句以下は倒敘法を用ふ。

【題義】唐は大寒の後の辰の日を臘日とす、日は時代により同じからず。もと獵により獸を取りて先祖を祭るより起るといへり。此日官民ともに宴飲あり、唐の宮廷にては近臣に食、物品を賜ふ。作者は至徳二年十二月巳に長安に還りて此日にあひ賜物をうけしによりて此詩を作る。

【詩意】いつもの臘日は暖かさまでになかなか遠いのだが、ことしの臘日はすつかりこほりがきえうせてしまつた。すなはち萱草までもが雪の色を侵してあらはれいで、柳のこえだのめぐみが春の光りをもたらしてゐる。自分はやつといましがた紫宸殿の朝參から退散して自宅へもどつたのだが十分さま

くとんでゐる。このとき賈舍人はもはや朝廷の參賀もすんで殿中の香煙をそのまま袖にたづさへて戻り來り、できた詩を筆をふるうてかきつけると珠玉のやうなりつばなものができあがつてゐる。なるほど君の御家は代代詔敕を起草するのであつてその世襲がいかにもごとであるかを知りたいとおもふならば現に今も鳳凰池上に鳳毛とも評すべき君が居らるるのをみればわかることである。

【餘論】左に賈至の原作と同時諸人の和作とを附記す。

早朝大明宮呈兩省僚友

賈至

銀燭朝天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣。百轉流鶯透建章。劍佩聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。共沐恩波鳳池裏。朝朝染翰侍君王。

和前

王維

絳幘雞人報曉籌。尙衣方進翠雲裘。九天闔闔開宮殿。萬國衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動。香煙欲傍袞龍浮。朝罷須裁五色詔。佩聲歸向鳳池頭。

和前

岑參

雞鳴紫陌曙光寒。鶯囀皇州春色闌。金闕曉鐘開萬戶。玉階仙仗擁千官。花迎劍佩星初落。柳拂旌旗露未乾。獨有鳳凰池上客。陽春一曲和皆難。

309
65

終